

カーティスのブロンプトン植物園附属図書室について

石倉和佳

拙稿「ウィリアム・カーティスの植物園」で論じたように、ウィリアム・カーティス(William Curtis, 1746-1799)は、1790年から会員制のブロンプトン植物園を運営した¹。この植物園には図書室が併設されていた。当時、印刷物の増加に伴い、読書層も増え、貸本屋や移動図書館の数が増大し、会員制の図書館も各地に多く作られ始めていた²。ただし、植物学や園芸にテーマを絞った一般に開かれた図書室となると、カーティスの植物園のものはイギリスで最初ではないかと言われている³。その図書室にどのような図書が配架されていたのか、そしてその図書群から当時の植物学がどのように見えてくるのか、それらを検討することは18世紀園芸文化を知るために意義のあることである。

カーティスは植物園の会員向けの小冊子、『会員カタログ』(*The Subscription Catalogue of the Brompton Botanic Garden*)を発行した。『会員カタログ』はカーティスが存命中毎年発行されたが、1790年から1792年までの号には、図書室の蔵書リストが掲載されている。今回、1791年の『会員カタログ』に掲載されている書籍群を中心に、書誌リストを作成した。現代の書誌情報として利用できるように、リスト作成においては必要な書誌情報を補って整えたものを掲載した。これは、『会員カタログ』の書誌情報は不十分で、現在では分かりにくい表記が多く含まれたリストとなっているためである。

たとえば、作者の氏名表記にファーストネームの省略が多く、タイトルも簡略化されていたり、当時言い慣

わされた通称で記載されていたりする。出版地は明記されておらず、年号においてはローマ数字の読み違いも時折見られる。このようなリストとなっている理由の一つとしては、植物園の会員におおよそどのような書籍があるかを知らせる目的以上のものが当初なかったということがあるだろう。また、おそらく植物園の図書室に司書等はおらず、カーティスか彼の助手として働いていた庭師等が書籍の管理に当たっていたと考えられるため、細かい文字表記への目が行き届かなかったことも考えられる。

書籍及び版を特定する際には、インターネット上に公開されている各種書誌情報を参考にした。大英図書館(British Library)の総合カタログを基本として、各種図書館の蔵書情報を参照するとともに、グーグル・ブックス(Google books)等の図書サービスも最大限活用した。今回まとめた図書リストに記載のある書籍のおよそ80%が、2016年現在インターネット上から無料でダウンロードできるものである。カーティスの時代にはその図書を手にすることそのものが垂涎的であったと考えられるような大部の図入り博物学図書も、現代ではインターネット上で多くが閲覧可能である⁴。必要な情報はこれらの書誌情報から補った。名字のみしか記載がないもの等不十分なものは、書名との組み合わせで姓および名を特定し、氏名の綴りについては最も良く使われているものを採用した。出版地名は参考資料から引き、ラテン語表記や英語以外のヨーロッパ言語の表記の場

合は書籍に書かれている通りにした。

カーティスの植物園附属の図書室は、庭がランベスにあった時から設置されていたが、その時の図書数はリストにあるよりも少ないものである。本稿では、ランベスの図書室にあったものを識別する印をつけている。また、1790年にブロンプトンに植物園を移し、会員もすぐに増えたこともあって、1791年までに図書数が増えている。それも印をつけて追加された書籍が分かるようにした。会員や、訪問者からの図書の寄付も多く、それらは『会員カタログ』に明記されているため、その旨リスト中に記載している。

カーティスは何故、本の寄贈者の氏名を書誌リストに明記していたのか。それは、書籍を通じた人的交流の状況を、間接的とはいえ会員に知らせることにもなったからではないか。この植物園は、園内の植物や書籍などが様々に会員の人々を取り結ぶコミュニティを形成しているのである。現代の私たちにとっても、どのような本の寄付が誰によってなされたかを知ることは、ブロンプトン植物園を中心とした人的ネットワークの有様を垣間見ることにもなる。ジョセフ・バンクスからの寄贈書が幾つかあり、バンクス監修の日本原産植物図集 (Kaempfer, *Icones Selectae Plantarum quas in Japonia*, 1791) が出版早々寄贈されていたりする。バンクスはカーティスの支援者の一人であり、この植物園にも多くの会費を納入していたが、こうした書物のやり取りからはとカーティスとの植物を通じた静かな友情を感じることもできる。その他多くの人々がこの図書室に書籍を寄贈しており、その中には作者が直々に持ってきたと考えられるものもある。寄贈された図書から、植物研究の最新情報が分かる場合もあれば、カーティスへの何らかの心遣いを示すものもあるだろう。土産代りに置いて行ったものもあるかもしれない。そうした書籍の交通の中に、当時の植物学と植物に関わる文芸と、庭園を行きかう人々との関係を知ることができるのである。

『ジェントルマンズ・マガジン』に掲載されたカーティ

スの追想録の筆者は、「彼が手にしたものの何であれ、何らかの優美さと簡素さとが行き渡っていた」 (“somewhat of elegance and neatness pervaded whatever he took in hand.”)⁵ と述べている。おそらく図書室の中もそのようであったと考えられる。どこか良い感じに作られており、そしてこざっぱりと片付いている—そんな印象だろう。ブロンプトンの図書室の内部を今に伝えるほとんど唯一のものとして、次のソーントンの記述が残されている。

A table is spread out the whole extent, covered with green cloth, for examination of the flowers gathered in the garden, and the study of them in the several works descriptive of plants. Every work of importance, in this branch of science, is to be met with here: and the student may fancy himself a thousand miles from London, only occasionally interrupted by the melody of songsters in the Aviary. To render this place still more a place of retreat, opposite to where are the British woods, the most ornamental trees and shrubs, and fragrant plants, are planted, which form an agreeable shade, well adapted to favour study. (Thornton, 26)

テーブルが部屋いっぱい広がっており、緑の布がかけられている。そこで庭で集めた花々を調べたり、植物について説明した幾つかの書籍からそれらの花々について研究したりするのだ。この科学研究の領域の、あらゆる重要な書籍とここで会う事になる。そしてここで学ぶ人は、ロンドンから千マイルも離れた場所にいるように想像するかもしれない。ほんの時折、鳥舎から聞こえる鳥のさえずりが遮るだけなのだから。この場所をより隠れ家のようにしているものは、反対側にイギリス自生の木々と最も装飾的な木々や灌木や香り良い草が植えられていることと、それによって心地の良い影が作られ、植物の研究に向けた場所となっているからである。

この記述からは、カーティスの図書室が単に書籍を参照するところではなく、植物園に生えている草を実際に観察することによる、植物学の勉強のために設置されているのが分かる。ソーホー地区(Soho)にあったジョセフ・バンクススの屋敷には立派な図書室があり、そこには多くの蔵書があったが、庭にある花を摘み、その花について調べるといった用途ではなかつただろう。それらの図書は今大英図書館にあるが、当然そこでも生きた花の観察と図書の閲覧とを同時にすることはできない。カーティスの図書室は、植物園、それもロンドンに自生の草花を配置した緑の広がりの中にあった。鳥舎は図書室の隣に設置されていた。そしておそらく日焼けを嫌う図書のために、図書室の周りには灌木が植えられていた。ソートンはカーティスの最晩年、この植物園の会員となっている。彼はこの図書室でおそらく何度も心地の良い時間を過ごしたに違いない。

カーティスは1791年の『会員カタログ』で、3冊の本が借り出されているが、戻ってきていない旨を書いている⁶。図書室から書籍がなくなることは、ランベスの植物園のときから起こっていたことだった。ランベスからブロンプトンに庭を移した際、かなりの書籍が紛失したようである。ここでは、1783年の『カタログ』(*A Catalogue of the British, Medical, Culinary, and Agricultural Plants*) に掲載されているが、ブロンプトン植物園の『カタログ』には見当たらない書籍を、下記に紹介しておく。

Battarra, Giovanni Antonio. *Fungorum Agri Ariminensis Historia*. 2nd. ed. Faventiae, 1759.

Curtis, William. *Illustration of Linnaeus' Classes and Orders of Plants, with Original Plates*. London, 1777.

---. *Instructions for Collecting and Preserving Insects*. London, 1771.

---. *Short History of the Brown-Tail Moth*. London,

1782.

Hales, Stephen. *Vegetable Staticks: or, an Account of Some Statical Experiments on the Sap in Vegetables*. London, 1727.

Jenkinson, James. *A Generic and Specific Description of British Plants Translated from the Genera et Species Plantarum of Linnaeus*. Kendal, 1775.

Linné, Carl von. *Nomenclator Botanicus*. Lipsiae, 1772.

---. *Systema Vegetabilium, a Murray*. Cottingae, 1774.

Milne, Colin. *A Botanical Dictionary: or, Elements of Systematic and Philosophical Botany*. London, 1770.

Scheuschzer, Johann. *Agrostographia*. ed. Albrecht von Haller. Tiguri, 1775.

Schreber, Johann Christian Daniel von. *Lithographia Halensis*. 1758.

Society of Physicians. *Medical Observations and Inquiries*. vol.5 London, 1776.

カーティスの自著が多く紛失しているのと、スティーヴン・ヘイルズの『植物静力学』が含まれているのが目に付く。どの本も、博物学、特に植物学を学ぶためには興味深い重要なものである。ランベスの植物園の会員数は少なく、カーティスは図書の貸し出しも頼まれば行っていた。借りたまま返さない人々も時にはいたことが推測できる。ソートンが夢見がちにすごした図書室の裏側では、結構現実的な問題が起こっていたということだろうか。

(石倉和佳)

¹拙稿「カーティスの植物園」(『ガーデン研究会ジャーナル 3、2017)では、カーティスの植物園の地割や、運営の経緯について記述しているので参照のこと。

²当時の図書館については、John Brewer, *The Pleasures of the Imagination* (Chicago: U of Chicago Press, 1997), 176-182参照。

³ Noblett はカーティスの図書室を “the first subscription library to be given over to a single scientific subject” と述べている。William Noblett, “William Curtis’s Botanical Library,” *The Library*, 6th Series, 9 (1987), 3.

⁴ Biodiversity Heritage Library <http://www.biodiversitylibrary.org/> が、博物学、植物学関係の図書を集約している点、およびカラー図版で閲覧できる点が優れている。ただし、同じ書籍の違う版を複数収録している場合が少なく、出版情報の詳細を辿るには他を参照する必要がある。

⁵ “Biographical Anecdotes of the late Mr William Curtis,” *Gentleman’s Magazine*, August, 1799, 639 参照。

⁶ 返されていないとカーティスが書いている図書は、自著の一つである *Instructions for Collecting and Preserving Insects* (London, 1771)と、フォーダイス (George Fordyce, 1736-1802) の *Elements of Agriculture and Vegetation* (London, 1781)、およびイタリアのスパランツァーニ (Lazzaro Spallanzani, 1729-1799) の書籍である。